

二条良基の「小島の口ずさみ」と「源氏物語」

稲田利徳

南北朝の動乱の最中、足利義詮の要請と祖母広義門院に擁立され、後光厳天皇が踐祚したのは、文和元年（三三）八月のことだった。

しかし、この年の暮れには、直冬が南朝にくんだり、幕府軍と対抗すべく南軍と協力体制を整え、翌文和二年五月には、京都侵入が開された。それに伴って幕府に反感を抱く直義派の武将の動きも活発となる。かかる状況のなかで、五月二十四日、幕府は南軍の襲来に備え、後光厳天皇の二条良基邸への行幸を奏請する。その理由を「園大曆」で洞院公賢は、「今日聞、可臨幸関白押小路亭之旨、武家奏聞、是義詮朝臣四條坊門富小路私宅、近々守護申之支度歟」、即ち、良基の押小路亭が義詮の四條坊門富小路の私宅に近く、守護しやすいためと臆測している。けれども同月二十六日に予定されていた行幸は、「公卿無領状之故云々、或云、本所卒爾之間、鋪設以下無用意之故歟云々」（園大曆）ということで延引された。

その後、南軍の攻撃は一段と激化し、京都に迫ったので、六月六日に天皇は良基の押小路亭に行幸、さらに「申斜許俄行幸山門」と延暦寺に移る。良基もこの日、輿に乗って延暦寺に向ったという

（園大曆）。

ついで六月九日、南軍の楠木正儀・石塔頼房らは、山名時氏らの軍と合体して京都市中に侵入、義詮を神楽岡・吉田河原の戦いで破った。ために義詮は南軍を支えきれず、遂に京都を放棄、比叡山で難を避けていた後光厳天皇を伴い、近江から美濃へ敗走、六月十三日、美濃の国の小島（岐阜県揖斐郡）を行宮の地としたのである。

一方、京都を占領した南軍は、公賢を太政大臣に任じ、天皇に随行した貴族の邸宅などを没収、天皇踐祚に関係した貴族を免官するという報復手段をとった。良基も踐祚の儀の談合を沙汰したとして、「関白家記文書悉収公」（園大曆、同年七月十一日の条）という愛目にあう。かかる不穏な情勢のなかで、その成り行きを、二尊院の南にある中院の草庵に引き籠って眺めていた良基は、七月二十日過ぎ、そこを出発、小島の行宮をめざして旅立った。この時の紀行文が、ここで対象にとりあげる「小島の口ずさみ」（をじまのすさみ）・「良基公紀行」・「美濃行幸略記」とも別称）である。

なお「園大曆」（八月五日の条）は、この良基の小島の行宮行きに対して、

二條関白良基公去月廿七日被參濃州歟云々。去月廿日比羅病、而依越坂本、自彼被參、近衛前関白・右府・此関白三人被參之由、應其召以早參人令関白之旨沙汰云々。而近衛者

猶先陣了、若□近日風名利曾無益歟、為之如何云々。

という記事、即ち、美濃の行宮から、近衛基嗣、道嗣、二条良基の三人のうち、最も早く小島に参着した者を関白にする旨があったので、良基は瘧病をおして駆け付けて行ったという裏話である。

二

さて「小島のロずさみ」（以下「ロずさみ」と略称）は、内容的にみて大きく三部に分けるのが適切といえる。

一つは、文和二年七月二十余日に都の草庵を旅立ち、途中、守山・鏡山・老曾の杜・不破の関などの著名な歌枕の地を実見し、そこに感興を催しながら小島に到着するまでの、いわゆる道行的、紀行文的な性格を有する部分、二つめは、小島の行宮での詩歌会をはじめとする生活叙述のなされた、いわば小島滞在記とでもいうべき部分、さらに三つめは、九月三日に足利尊氏が東軍を領導して垂井に到着し、やがて京都に還幸するまでの行程を記した部分である。

「ロずさみ」の従前の研究には、早く福井久蔵氏『二条良基』に簡単な解題があつたが、その後、前半部と後半部の一貫性に欠ける要因などを推測した、伊藤敬氏の論（『新北朝の人と文学』所収）、執筆の時期や意図に触れた、杉浦清志氏の論（『小島のロずさみの成立』）、それにごく最近刊行の、木藤才蔵氏『二条良基の研究』にも、この作品に触れる所があり、それぞれに示唆深い。そこで、ここでは、これら従前の研究も踏まえながら、「ロずさみ」における「源氏物語」の影響の痕跡を辿つてみた。

「ロずさみ」における「源氏物語」の受容のことは、早く、吉沢

義則氏にも若干の指摘があつたが、改めて「ロずさみ」を読み返してみると、その影響関係は、単に表現面の摂取といった次元を越え、作品自体の構想とも緊密に結び合い、かなり重要な問題を含んでいると思われる。

以下、「小島のロずさみ」の本文は、比較的善本と思われる、書陵部本「をじまのすさび」（五二一―五二〇）を底本に用い、適宜、漢字宛、句読点、濁点などを施して判読しやすくした。さらに、群書類従卷三三三「小島のロずさみ」、元禄七年版本「をじまのすさび」、内閣文庫本「美濃行幸路記」（七一―七三画）、彰考館本「美濃行幸路記」の諸本でもって校訂した。校訂した箇所は、本文を括弧でくつておくが、どの伝本に依拠したかは、煩瑣になるので割愛した。一方、「源氏物語」は日本古典文学大系の本文で引用する。

三

良基が「源氏物語」に通暁していたこと、また、連歌における典故として「源氏物語」を一番尊重していたことは、「筑波問答」で、「連歌稽古には、何か肝要の物にて侍るべき」との質問に対し、

この比は、万葉はやりて侍り。まことに歌の根源にてあればよく御覧すべきにや。そのほか、日本紀・風土記は国の名所のおこりなど書きたる物なれば、深く稽古あらん人は御覧すべきにこそ。又、源氏物語・伊勢物語・古今以来代々の撰集の名寄などやうの物を、常に見給ふべきにこそ。

と答えたり、また、連歌の寄合に關しても、「源氏寄合へ第一事也」（九州問答）⁽³⁾としたり、「光源氏一部連歌寄合」などの作成に關与していたことによつても、その一端が察知される。

良基の「源氏物語」への造詣の深さは、連歌作品ばかりではなく、彼の日記、紀行文などの著作類にも反映している。

まず、「小島のロずさみ」の冒頭は、次のように起筆される。

小倉山の麓、中院の草の庵を、身の隠れ家と頼み侍りし比、⁽¹⁾瘧病にさへ煩ひて、いとど露の命も消えぬべき心地して、物心細かりしかば、⁽²⁾万に呪ひ、年老たる大徳など語らひて、さるべき符作り、⁽³⁾加持などせしかど、猶おこたらず。⁽⁴⁾「げに、ししこらかしぬるよ」と思ひやるかたぞなかりし。

草庵に引き籠もる隠遁的な生活状態と執拗な病気に悩まされる我が身を嘆息しているが、ここは「源氏物語」若紫の巻の冒頭部文、

わらは病にわづらひ給ひて、よろづに、まじなひ・加持などまゐらせ給へど、しるしなくて、あまたよび起り給へば、ある人、「北山になむ、なにかし寺といふところに、かしこき行人侍る。去年の夏も、世におこりて、ひとく、まじなひわづらひしを、やがて、とどむるたくひ、あまた侍りき。しよこらかしつる時は、うたて侍るを、とくこそ心みさせ給はめ」など、きこゆれば、

という周知の場面を念頭に叙述されていることは容易に想像される。

若紫の冒頭は、源氏が「わらは病」の治療のために、北山の優れた行者の許を訪れる場面であるが、良基自身も「瘧病」にかかっていたこと⁽¹⁾と⁽²⁾、あれこれ加持祈禱するけれども治癒しない様子⁽³⁾と⁽⁴⁾、それに「ししこらかす」⁽⁴⁾と⁽⁴⁾という特殊な言葉の一致などからみて、良基が「源氏物語」を重層させながら執筆していたことは確実である（因みに「光源氏一部連歌寄合」や

「源氏小鏡」⁽⁹⁾でも、若紫の巻の源氏寄合として「わらはやみ 瘧病也」を指示する。

このように良基は、自身を光源氏の立場と重ねて記述しているが、これは後述するように、やがて良基が美濃の小島の行宮へ出発することと、光源氏が須磨に下ることを重層させる端緒となっている。良基が、須磨へ下る以前の光源氏の足跡のなかで、敢えて若紫の巻の源氏と重ねたのは、良基自身、まさしく「瘧病」を煩っていたこと（園太麿）、それに、若紫の巻の北山の場面は、良基が「西の国の、おもしろき浦／＼」として、「近き所には、播磨の明石の浦こそ、なほ、殊に侍れ」と語り、後に源氏が須磨・明石に下る伏線をなしていることなども関連していよう。

「ロずさみ」は、冒頭の部分に続いて、都を旅立つときの様子を「七月二十日あまり、有明の月まだ夜深きに、草の庵を立ち出でて東路遠く思ひ立つ」と記す。この場面は、源氏が須磨に下る前、左大臣邸へ暇乞いに行き、一泊して、「明けぬれば、夜ふかく出で給ふに、有明の月いとをかし」という場面とか、須磨出発の当日の「例の、夜深く出で給ふ。（中略）月影にいみじうをかしげに居給へり」などを重ねているのかもしれない。

要するに、良基は「ロずさみ」執筆に際し、美濃国小島の行宮へ下る自身を（東と西と方角は反対ではあるが）、須磨に下る源氏の行動と重層させようとする構想を抱いていたと臆測されるのである。

都に、紫の上をはじめ、多数の親愛なる人達を残して須磨に退去する源氏の悲痛な心境は、南軍の占領下のもとで憂日にあひ、後ろ髪を引かれる思いで美濃の頼宮に向う良基自身の心境と響き合うも

のがあつての目論みと思われる。

京都を出離した良基は、その後、守山・野路の篠原・鏡山・老曾の杜・犬上・鳥籠の山・伊吹の岳・小野・醒が井・不破の関・関の藤川などの名所歌枕の地や風光を眺めながら、輿に乗つての旅を続ける。そして、歌枕を実際に見聞し、「名はことごとしけれど、さして見所なし」（守山）と落胆したり、あるときは「山もとかけてながめの末、いと見所多し」（老曾の杜）と感興を催して和歌を詠出したりする。

けれども、この道行的な文章には、「源氏物語」を強く意識した部分は見当らず、専ら「古今集」をはじめとする歌集の世界との交感が主軸をなしている。当然、「源氏物語」を想起してよい地名——例えば「小野」（滋賀県彦根市小野町）にさしかかったとき、「此の所の同じ名は、古き歌などにも多く侍れど、惟喬の親王の住みかならねば、思ひやるも、物浅き心地ぞせし」と洩らす。即ち、この「小野」は、「伊勢物語」（第八十三段）にみえる、惟喬親王の隠棲の地、「比叡の山のふもと」の「小野」と同名だが、彼の籠った土地ではないので感興も湧かないと通過する。比叡山の麓の坂本の小野の地は、惟喬親王だけでなく、古来、無用者や世捨人の籠る空間であり、「源氏物語」でも、横川僧都やその妹の尼、それに、落葉宮、浮舟などが隠棲した土地でもあったが、良基は、ただ「伊勢物語」に触れるだけで、「源氏物語」には言及していない。

四

良基は、普通なら二、三日で到着できる行程を、病気に悩まされたこともあって、五、六日を要して、やっと小島の頓宮に辿り着

く。そして、頓宮を取り囲む深山の荒涼たる光景を一見し、次のような衝撃を受ける。

（目）も習はぬ所のけしき、左も右も、そびえたる山に雲いと深うかかりて、さらに晴間なし。げに又なう哀れなるものは、かかる所なりける。時しも秋の深山のありさま、ただをしこめて言ひ知らぬ物のあはれ、いはんかたなし。鹿の音・虫の声もかの松蔭にて聞きし秋は、ものの数ならず覚えしは、ただ所がらの思ひなしにや。

この描写は、すでに指摘もあるように、光源氏の配流の地の須磨の著名な描写である、

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこしとほけれど、行平の中納言の、「関ふき越ゆる」と言ひけむ浦波、夜くはげに、いと近う聞えて、またなく、あはれなるものは、かゝる所の秋なりけり。

（須磨）

を想像して記している。特に傍線部分は「源氏物語」の本文をほとんどそのまま引用しているといつてもよい。どうやら、良基は、小島の頓宮の地を、源氏の配流の地である須磨と重ねようと企図していたらしい（なお、波線以下の描写も、賢木の巻で、源氏が、嵯峨の野宮の六条御息所を訪れる場面をも想起させるものがある）。

小島の頓宮にあって、良基はまず叔父良冬の宿所に入居したが、「この宿のありさま、芽が軒端、竹の編戸、まばらなる簀子より、風もたまらず吹きあげて、一夜だに猶宿りがたし」と慨嘆し、さらに頓宮を眼前にして、「このあたりには稀なる板葺なれど、山はさながら軒端にて、雲霧の晴間なし」と描写するが、これも、直接その表現を撰取してはいないものの、源氏の須磨の侘び住いを綴った

「所のさま、絵に書きたらむやうなるに、竹編める垣しわたして、石の階・松の柱おろそかなるものから、珍らかにをかし」(須磨)なども念頭にしていたかもしれない。

もつとも、小島の頼宮は深山の中にあるのに対し、源氏の流調の地は、「おはすべき所は、行平の中納言の、『漢潮たれつゝわび』ける家居、近きわたりなりけり。海面はやゝ入りて、あはれに、すごげなる山なかなり」(須磨)とされるものの、海浜に近い所であった。

都を逃れきたった場所が、良基の場合は深山、源氏は海浜の近くであったというギャップは、良基のいる場所を源氏の配流の場所と重層させるのに、いささか融合しないところでもある。

頼宮で良基は天皇から、「これまで参りぬるうへは、床を並べん契り、さらに変り侍らじ」との懇ろな言葉をかけられたが、その際、彼は、

知らざりきならばぬ山の陰までも床を並べん契りありとは

と詠じ、さらにその後「神代をかけたる古事ども取り出でたるも、いとおこがましくや」と苦笑している。この「神代をかけたる古事」とは、「日本書紀」(神代卷)の「海宮遊幸」で、「海神聞きて曰く、『試みに以て察む』と言ひて、すなはち三の床を設けて請入さしむ」と、海王が三つの床を並べて、山幸彦を招じ入れたという故事を念頭にしているのかと思うが、天皇の「床を並べん契り」に着目し、こんな深山の蔭にも、あの海中のごとき「床を並べん契り」があったのかと戯れたのであろう。こういった発想をとること自体、この小島の地が、海辺であれば、なおいっそう、源氏のケースと一致するであろうのといった意識が、良基の脳裡にやどっていたた

めではなからうか。

小島で生活する良基の心境は、「日数のみふる雨の中、いとど晴れぬ雲井は、山高き心地して、物むつかし」と憂鬱な思いに閉ざされている。都から来た殿上人達が、それぞれ名所見物に出かけても、良基は「猶心に茂る八重葎の露けさに、さやうの友にだに誘はれず、あかしくらすも、ただわが身ひとつの秋とのみ覚えて、いと慰(め)がたし」などと古歌を引用しながら孤独な愁いをかこち、一日も早く、鎌倉大納言(足利尊氏)の援軍が到着し、都に凱旋する日を待望している。

この鬱々たる心境は、須磨にあって、「雲間もなく、明け暮るゝ日数にそへて、京の方も、いとどおぼつかなく」(明石)と都に残した人々を思いやり、枕も浮くばかり涙する、光源氏の心情と共鳴しあうものであった。そのことは例えば、「口ずさみ」のなかで、八月十五夜の月を見て、

習はぬ山の御住居、猶世づかぬ心地して、都の恋しきぞ明け暮れの思ひにてありし。名高き半ばの月をさへ隔て顔なる雨雲は、猶晴れやらす。二千里の外の故人の心もかくこそは、とりあつてものあはれな(り)。

と、都を恋しく思う場面でも顕著である。勿論、こここの傍線部分(2)は、「白氏文集」巻十四(八月十五日夜、禁中独直対月憶三元九)に典拠をもち、「和漢朗詠集」にもとられた、「三五夜中新月色、二千里外故人心」を下敷きにしてはいるが、より直接的には、次の須磨にあっての光源氏の回想場面と関連するとみてよい。

月、いと花やかにさし出でたるに「今夜は十五夜なりけり」とおぼし出で、殿上の御遊び恋しう、「所々、ながめ給ふら

んかし」と思ひやりたまふにつけても、月のかほのみ、まばらに給ふ。「二千里の外故人の心」と誦じ給へる、例の、なみだもどめられず。入道の宮の「きりや隔つる」との給はせし程、いはん方なく恋しう、をりくのこと思ひ出で給ふに、
「よゝ」と泣かれ給ふ。
(須磨)

この「ロずさみ」と「源氏物語」の文章は、共に、都から離れた荒涼たる地であつて、八月十五夜の月を眺めながら、ひたすら都を恋しく思う場面であり、その感情を、「白氏文集」の「二千里外故人心」(②と③)の詩句を挿入させて感傷的な気分を増幅させている点からみて、良基が「源氏物語」の先の場面を想起して、記述していたとみなしてよからう。さらに、「入道の宮の『きりや隔つる』との給はせし程」とは、藤壺がかつて源氏と離別する際に詠じた九重に霧やへだつる雲の上の月をはるかに思ひやるかな
(賢木)

の詠歌を指すが、この月を霧が隔てるさまも、先の「ロずさみ」の傍線(1)と様子を同じくする。

良基はこの後も、「内裏の庭も、さながら田面に続き、稲葉の山も遠からねば、又婦り来ん都の頼みならでは待つ事もなし」と、「古今集」の行平の歌を介して、都への帰還を切望していたが、八月末になつて、ようやく足利尊氏が尾張に到着する。よつて後光厳天皇は小島の頼宮より垂井(美濃国不破郡垂井)へ行幸することになる。垂井の頼宮は、美濃の守護土岐頼康が造つた黒木の御所であつたという。

この垂井にあつて、良基たちは、恐怖のために、二度肝をひやしている。一つは、「(八月)二十六日夜、近江の凶徒ばら、蜂屋とか

や、此の国へ打ち入るべし」との情報を耳にしたときで、人々は右往左往して、大へんな騒ぎとなるが「暁がたに別の事侍らぬ由」を告げられ、安堵の胸をなでおろした。もう一つは、激しい風雨の襲来にあつたことである。

実はその風雨襲来の以前の九月三日には、尊氏が颯爽と垂井に到着、良基は、頼もしさと仁義をわきまえた尊氏の行動を詳細に記す。そして重陽の御会などがあり、天皇と良基の鸚鵡返し(うづつみ)の贈答歌が記録される。その後、「ロずさみ」の構想を暗示する暴風雨のことが、いささかパラノスを崩すほどの詳細さで描写される。次はその一節である。

今日にて有りしやらん、(1)にはかに風いみじう吹き出でて、罪れ行くまに物も見えず。おびただしう吹きまどはして、山の木どもも多く吹き倒し、四方の叢はさらには、(2)肘笠雨とか降り出でて、(3)神鳴りひらめき、落ちかかる心地して、(4)いといみじ。雨の足あたる所は、皆とをりぬべくはらめき、(5)笠も取りあへず、あはただしければ、「こはいかなる事にか」と、又心惑ひいはんかたなし。

この暴風雨の描写は、ただちに須磨の巻で、源氏が三月朔日の巳の日に御禊をしていたとき、突如、襲来した雷鳴をともなつた、次の暴風雨の場面を想起させる。

八百よろづ神もあはれと思ふらむをさせる罪のそれとなければとのたまふに、(6)にはかに風ふき出でて、空もかき暮れぬ。御祓もしてず、たちさわぎたり。「ひちがさ雨」とか降りきて、(7)いと、あわたどしければ、みな婦り給はんとするに笠もとりあへず。さる心もなきに、よろづ吹きちらし、またなき風なり。

波いと舛しう立ちきて、人ノ^⑤の、足をそらなり。海の面は、ふすまを張りたらむやうに光満ちて、神、鳴りひらめく。落ちかゝる心地して辛うじて……なほ止まず鳴りみちて、雨の足、あたるどころ通りぬべく、はらめき落つ。

この「口ずさみ」と「源氏物語」の暴風雨の描写を比較してみると、「肘笠雨」（催馬楽、などの典故を有する語句の一致だけでなく、③と④、④と⑤の各傍線部分などをはじめ、「口ずさみ」は、「源氏物語」の表現を、ほとんどそのまま撰取し、それを適当にアレンジして文章を仕立てあげていることが明瞭である。こゝは、後述するように、良基が「口ずさみ」をどのような構想のもとで執筆したかを示唆する重要な箇所であり、看過できない。

なお、良基達は、暴風雨の最中、垂井の頓宮は黒木の柱で強くなくて不安であるため、一時、民安寺（滋賀県垂井町府中）に避難するが、この住居移動も、光源氏の御座所を、「うしろの方なる、大炊殿とおぼしき屋に、うつしたてまつり」（明石）という行為と一致することも付言しておきたい。

五

垂井の行宮に、突如襲った暴風雨が治まった後、足利義詮が都から到着、いよいよ尊氏らとともに帰京の途に付く。途中、敏満寺（滋賀県犬上郡多賀町）、武佐寺（近江八幡市武佐町）、石山寺（大津市石山）などに立ち寄り、もとの内裏（土御門殿）に入り、久しぶりに逢う人々との歡喜の描写が綴られる。

この都への還幸のくだりには、「源氏物語」のある場面を強く意識して記したと思われる箇所はあまりない。第一部、第二部とは相

違して、尊氏や義詮らのひきいる軍兵の絢爛たる行列の様子などが中心的に描写される。ただ、内裏に入ったところの、

百敷も見しにかはらず、典侍・内侍さぶらふ人々、有りしながらの面影めづらしといふも、猶世の常也。此の程憂かりつる旅寝の夢残りなくて、今はいはんかたなうめでたし。京に有る人々も不思議の事にのしる。

という、懐しい人々との再会の場面は、源氏が三年ぶりに京に帰り、二条院に姿を現した時の、

二条院におはしまし着きて、宮この人も、御供の人も、夢の心地して行きあひ、喜び泣きも、ゆゑしきまで、たち騒ぎたり。（明石）

とか、内裏に現れた源氏を見て、

女房などの、院の御時よりさぶらひて、老いしらへるどもは、かなしくて、今更に、泣き騒ぎ、めできこゆ。（明石）

といった、一連のシーンを想起させはするが、表現などを直接撰取した気配はない。

それよりも、「源氏物語」との関連で興味深いのは、都へ還幸する天皇の行列を見物する群衆を、「物（見）る山賤、しはふる人さへ立ち込みて、所せきまでぞ有りし」と表現しているところである。

「しはふるひ」「しはふるひ人」は、「源氏物語」に二例みえるが、他の王朝文学に用例のない珍しい語彙である。しかも、この語の意味するところは不明瞭で、『河海抄』が「柴振人」「皺古人」の両説をあげ、「物語面賤者躰也、老人とはみえざる敷」（阿仏房説）とするほか、「原中最秘抄」「紫明抄」「仙源抄」などはじめ

多くの古注釈が言及するところである。そして、「轍古人」とみて老人のこと、「柴振人」として賤者、「咳ふる人」で、よく咳をする老人などの諸説が提示されてきた。

この「しはふるひ」⁽¹⁾「しはふるひ人」に関しては、すでに寺本直彦氏の詳細な考察がある。氏は、「源頼政と源氏物語」の項で、頼政の、

山家夏述懐を

我におとる人こそなけれ山里になつぞひきをるしはふるひまで^(人)

(頼政集)

の歌を端緒にして、「源氏物語」の諸本間の本文のゆれを整理し、さらに古注釈なども参照して、頼政が「しはふるひ人」を「賤者」の意に解していたと結論付ける。「源氏物語」には、賢木と明石の巻に「しはふるひ」がみえるが、明石の巻の場面は、源氏が琴を弾くところで、次のように描写される。

かの岡のべの家も、松のひどぎ、浪の音にあひて、心ばせあ
る若人は、身にしみておもふべかめり。何とも聞きわくまじき
このもかもの、しはふるひ人も、すどろはしく、濱風を引き
ありく。

従つて、良基は、先の見物人を「しはふる人」(諸本異文なし)を「源氏物語」を意識してとりだし、しかもその語義を、「物見山賤、しはふる人さへ」と「山賤」と並列しているので「賤者」とみなしていたらしく思える。

因みに、この「しはふるひ人」は、頼政の和歌にはみえるものの和歌の分野でもほとんど用例を見出せず、わずかに正徹に、

谷樵夫

せくとなき谷の水おちをとたえてわたりつづける柴ふるひ人

(草根集・卷十一)

を見出した程度で、これも歌題から判断して、「賤者」と解している。

このほか、良基は「さかき葉の日記」⁽²⁾で、貞治五年八月十二日の春日の神木掃座の際の様子を記録したところでも、

其日に成ぬれば、都の中ゆすりみちて、物みるもの、あやし
のしはふるひ人、おさめ、みかは、たびし、かはらなどまで、
あしをそらにて、六條殿へとはしる。

と、「しはふるひ人」を登場させる。良基の術学趣味の一端が示されていく興味深い。

京への還幸の際には、あと一つ、石山寺に立ち寄ったところが、「源氏物語」と関連する。

又の日は空も晴れて、人々皆朝衣にて供奉(す)。武佐寺に御
着きあり。それより石山へ着かせ給ふ。本堂の前に御所をまう
けたり。潮ならぬ海、こもとに見えて、いとおもしろ(し)。
観音の利生方便も、此の御幸には、いとど光そふらんとめでた
し。

ここで琵琶湖のことを、わざわざ「潮ならぬ海」とするのは、「源氏物語」で、源氏が石山寺参詣の帰途、空蟬に逢い、消息をつかわす場面の、

一日は、ちぎりしられしを、さは思し知りけむや。

わくらはは行きあふみちをたのみしもなほかひなしや潮ならぬ海
関守の、さもうらやましく、目ざましかりしかな。(関屋)

の歌を念頭にしたものだろう。「潮ならぬ海」は、「光源氏一部連

歌寄合之事⁽¹⁷⁾」や「源氏小鏡」でも、関屋の巻の寄合項目の一つに掲出されている。

ただ、石山寺といえは、例の、石山寺における「源氏物語」執筆伝説、

石山寺に通夜してこの事をいのり申けるにおりしも八月十五夜の月湖水にうつりて心のすみわたるまゝに物かたりの風情空にうかひける……
(河海抄)

が、当然想起されてもよいが、良基はそのことには一言も触れていない。この「源氏物語」起筆の石山寺參籠伝説は、阿仏尼・為家以前、さらに鎌倉初期には、すでに発生しており、良基が耳にしていた可能性は十分あるが、触れていない。

この他に「ロズさみ」と「源氏物語」との関連では、「又当座のいたづら事は、中々見苦しうとて、皆もらしつ」といった筆法が「源氏物語」に頻出する「例のもらしつ」の筆法を模倣したもの、「峯の松風荒ましく吹きおろし」などが、「源氏物語」特有の風の吹き方である「荒まし」を取り込んだもの、良基が坂本に到着した時、山法師が「草のむしろの露うち払ひて」経営したという「草のむしろ」も、「光源氏一部連歌寄合」で若紫の巻の寄合項目に掲出されているので、各々に「源氏物語」を意識していたのかもしれない。

このような語彙単位のものになると、「源氏物語」から撰取したのではないかと思われるものが、他にも若干認められるが、煩瑣になるので、ここでは割愛する。

六

「小島のロズさみ」に撰取された「源氏物語」の場面や描写を摘出し、若干のコメントを加えてきたが、この検証によって、「ロズさみ」の成立にとって「源氏物語」がいかに重要な背景をなしているかが、改めて認識された。それは先述したように、単なる語彙や表現の受容にとどまらず、「ロズさみ」の作品としての構想と緊密に関連している。

即ち、その構想とは、南軍の京都侵略によって都を逃れた良基が、美濃の小島の頓宮に下り、やがて尊氏らの援助によって再び帰還してきた一連の行程を、「よごさまの罪」にあたり、須磨・明石に下り、流離の苦痛を舐めたあと、再び都に帰ってくるという「源氏物語」の光源氏の事跡とを交響させようとしていることである。

こういった構想論は、特に、「ロズさみ」と「源氏物語」との受容関係を逐一検証しての発言ではないが、「ロズさみ」の成立に言及した杉浦清志氏により、

罪なくして都を追われた貴人が、いくつもの苦難を経た後、武將の助けを得て都へ帰るといふ本作の構想そのものが、『源氏物語』『須磨』『明石』兩巻における光源氏の流寓と帰還を模したものであったのではなからうか。

との意見がすでに提出されているが、首肯される見解である。

ここで「ロズさみ」の、「源氏物語」を重ねさせた構想を、先の検証事実を踏まえながら再度検討しておく。

「ロズさみ」の冒頭は、「源氏物語」の若紫の巻の巻頭を下敷にして書かれているが、これは良基が、まさしく「瘧病」を煩つてい

たことと関連する。しかし、若紫の巻と重ねたのは、単にそれだけではなく、その良清の発言が、後の源氏の須磨・明石へ下る伏線になっていることも、同時に込められているよう。

やがて病氣をおして都から小島の頼宮に下ってゆく良基の姿は、須磨に下る光源氏の身さながらである。

そして、小島の頼宮にあっても良基は、「げに又なうあはれなるものは、かかる所なりけり」と、明らかに須磨の描写を受け、この地を源氏の配流の地と重ねている。雨に降り込められて、ひたすら都を恋しく思う良基の心境は、須磨の地にあつて、都に残した人々を思いやり、枕も浮くばかり涙する源氏の心情と響き合っている。

その心情の響き合いは、八月十五夜の月を眺め、「二千里の外の故人の心」という、須磨の巻の一節を撰取したあたりに、最も顯著に現れている。

そして、この一連の構想を、享受者側にも強く印象付けるのは、雷を伴った暴風雨の描写である。

「源氏物語」において、この暴風雨のもつ意味は、極めて重要であり、

須磨にさすらう源氏は、最も困難な試練の危機をのりこえるべく、卓絶したシャーマン性を發揮する。あるいは、呪的なシャーマン性を賦与される。三月上巳の祓に、暴風雨に襲われるのは、神的なものの源氏への暴力的な侵入であり、神と人との交感の風景でもあった。⁽²⁰⁾

といった見解も提出されている。この見解の当否はさておき、故桐壺院を夢の中で見て、院より、「など、かくあやしき所には、ものするぞ」「住吉の神の導き給ふまゝに、はや、舟出して、この浦を

去りね」と促され、須磨の地を離れ、明石に向う契機となる。

一方、都でも「三月十三日、神、鳴り閃めき、雨・風さわがしき夜」、朱雀帝の夢に故桐壺院が出現、院に甞まれた帝は目を煩って、源氏召還の意志をかためるのも、暴風雨が契機になっている。

「口ずさみ」の中では、故桐壺院に該当するものはないが、強いて言えば、それは杉浦氏も指摘したように、足利尊氏や義詮ともいえるようか。

ともかく垂井の頼宮を襲った暴風雨は、良基たちを散しい試練に遭遇させると同時に、まもなく都へ還幸する予兆としての意味をもっている。

やがて良基たちは、後光厳天皇を押し奉り、尊氏たちの援軍を得て、見事に都に帰還する。それは三年の辛苦の歳月の後に都に帰ってきた光源氏と比較して、わずか二か月ほどの短期間ではあったが、自分達の帰還を源氏のそれと重ねる構想を抱いて記していたことは間違いないところである。

ところで良基は、「源氏物語」を下敷きした、これほど緊密な構想を、執筆当初から企図していたのであろうか。「口ずさみ」の末尾をみると、

かやうに例少なかりつる世の式、後の物語りにもと思ひて、ありのままの事を、旅寝のつれづれに忘れじと、畳紙の端など引き破りて書付け侍る事も、いと見苦し。過ぎ行く方は忘れ難きならひなれば、かかる一筆のことの葉も、自ずから忍ぶ草の種とはなどか成り侍らざらむ。

と、執筆の動機や過程に触れている。これによると、旅中において折々の出来事や感想を畳紙などにメモし、それをもとに書き上げた

ことになる。

さらに「口ずさみ」では、最後に跋文として、「此の草子は、小島にて書きたりしままなる、あまりにいふばかりなき事ども多し。歌など(引)直すべし。銘は内の御方の御手也」を付加する。「内の御方」は、後光厳天皇を指すかと思うが、天皇にこの作品を献上し、書名を宸筆で頂戴したらしい。

この後光厳天皇へ進覧する際、「小島にて書きたりしまま」ではなく、草稿やメモに手を加え、加筆した可能性が強い。須磨に配流された源氏の行程と、「口ずさみ」における自分達とを重ねようとする構想は、執筆当初からあったと思われるが、この加筆の際に一段と明確になったのではなからうか。

その証拠の一端は、例の暴風雨の記事のところで、九月九月の翌日の天皇との鸚鵡返し(ウツリカエシ)の贈答歌をした後に、突然「今日にて有りしやらん、にはかに風いみじう吹き出でて」と、正確な月日を確定しえず、回想的に挿入しているところにも如実に窺うことができる。この事実からすると、先に検証した、「源氏物語」とかわる描写表現のなかにも、後に加筆されたものがあつたかもしれない。

このことは「口ずさみ」の前半と後半とが一貫性に欠けるうらみがあるとする、伊藤敬氏の見解ともかわる。氏は、前半は自分の道行の美文、小島到着後は、朝夕に馴れ仕える主上と自分とのことが中心となるが、尊氏の軍兵と合体後から還幸までは、天皇と武將との行動の記録が中心となり、一貫性がないとする。

確かに、「源氏物語」の光源氏の須磨・明石への配流と重ねた構想を念頭に、「口ずさみ」を読んでゆくと、前半のあたりの良基の姿は、同時に光源氏像とダブっているが、後半になると、源氏に該

当する存在は、良基自身ではなく、後光厳天皇に摩り替っている気配がある。

天皇が内裏に帰還した時も、「ありがたかりける聖運なれば、行末いとのたのもしかるべき事にこそ」とし、さらに九月還幸の先例として、霊龜三年の元正天皇の美濃行幸を引き合いに出し、「九月の佳例」とし、「殊にめでたしとぞ沙汰ありし」と記述している。

これは恐らく、都へ帰還した源氏が、それ以後、着々と政治的権力を増大させ、六条院の栄華を築きあげたことに象徴されるような、栄光をきわめてゆく、それを「聖運」と重ね、後光厳天皇の先途を祝賀しようと企図したものと解される。

「口ずさみ」の執筆が、「源氏物語」の須磨・明石の光源氏の流浪と帰還を重ねて構想されていることは、光源氏には良基自身よりも、後光厳天皇を擬し、同時に天皇に対し、光源氏のごとき栄華を予祝する意図が込められていたのであろう。そのことは同時に、この「口ずさみ」が、天皇に対する良基の忠誠の証しであるとともに、南北朝の乱世に生を営む良基の、平和な御代を希求する悲願の書でもあつたといえよう。

〔注〕

- (1) 昭和十五年刊行の太平洋社版による。以下、同じ。
- (2) 北海道教育大学人文論究 第四十二号、昭和57年3月。
- (3) 『新訂室町文学史』(日本文学全史巻六)。
- (4) 『連歌論集・俳論集』(日本古典文学大系)所収本による。
- (5) 岩波文庫『連歌論集上』所収本による。
- (6) 古典文庫『良基連歌論集三』所収本による。

- (7) 寺本直彦著『源氏物語受容史論考 正和』にも、良基と「源氏物語」の関連に触れるところがある。
- (8) このことは、注(3)の書物にも指摘がある。
- (9) 武田孝編著『源氏小鏡』高井繁本に依拠。
- (10) この「小野」に関しては、小林正明氏「最後の浮舟」(物語研究、昭61・4)に詳しい。
- (11) 注(3)の書物やドナルド・キーン著『百代の過客』など。
- (12) 日本古典文学大系に依拠。
- (13) 玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』に依拠。
- (14) 『源氏物語受容史論考 続編』。
- (15) 『私家集大成』中世Ⅳに依拠。
- (16) 群書類従卷十七。
- (17) 注(6)に同じ。
- (18) 注(14)の著書などに考察がある。
- (19) 注(2)の論考。
- (20) 関根賢司著『物語空間』ことばたちの森へ。
- (21) 『新北朝の人と文学』。

— 岡山大学教授 —